

財団法人

日韓文化交流基金 NEWS



日韓青少年交流ワークショップ
—韓国語でノジマー—

助成事業紹介

日本—韓国 秋吉台プロジェクト
2000→2001「ブリッジ／Bridge」

2002年度訪日・訪韓フェローシップ募集要項

no. 18

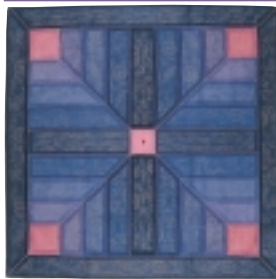
2001

The Japan-Korea Cultural Foundation

金賢姫 (キム ヒョンヒ)

- 1946 韓国京畿道生まれ。18歳の時から、刺し子としての道を歩み始める
- 1984 第9回韓国伝統工芸展に入選。以後毎年、奨励賞、特別賞などの受賞を重ねる
- 1990 東京の高島屋にて「韓国伝統工芸展」招待展
- 1994 国務総理賞を受賞
- 1995 東京の韓国文化院にて個展
- 1996 ソウルの一民美術館にて個展
- 1999 『韓国のパッチワーク〜ボジャギ』出版 (文化出版局)
- 現在、刺し子・ボジャギの「名匠」として作家活動を行うかたわら、伝統工芸建築学校にて後進の指導にあたっている

表紙作品



熟練紗チヨガッポ
68×68センチ

表紙撮影：縣 正三

日韓文化交流基金NEWS

● 目次 ●

- 2 巻頭エッセイ
〈影〉を描く 小倉紀藏
- 表紙作家紹介および表紙作品題名
- 3 韓国理解促進事業
日韓青少年交流ワークショップ
—韓国語でノジマー—
- 6 日韓共同研究フォーラム
第1次研究ターム論文集続刊
- 7 調査ノート
日本における韓国・朝鮮研究 図書館編 2
- 8 助成事業紹介
日本—韓国秋吉台プロジェクト
2000→2001「ブリッジ／Bridge」
「紆余曲折」と「方向転換」の意味 木村典子
「ブリッジ」のきっかけをつくる 福田泰嗣
- 10 日韓文化交流基金事業報告
- 12 2002年度訪日・訪韓フェローシップ募集要項

私は山に登っている。もう十年も前、韓国に暮らしていたときのことだ。初夏の頃だったろうか、山は突兀と聳え、日曜日なのだろう、人びとが賑やかだった。前方を見ると、私の先を登っているのは、少女と父親であった。十歳ぐらいの少女は、磊々たる登り道を、父の手を強く握りながら歩んでいる。すれ違ふのは会社の仲間か、三十代ぐらいの男たちが赤や黄色の派手な服を着て下りてくる。韓国の山登りは、時局を論じる声、家族の問題を吐露する声、大声で歌う声などが餅しあつて、実に楽しく現世的なのだ。

そんな山行きの道を、私もまた楽しんでいくはずであった。しかし私は次の瞬間、まざまざと目にしたのだ。自らが韓国人の中に分け入り、彼らの紐帯を攪拌しようとする姿を。休日山登り。この国の人びとのさやかな安逸と幸福を、私は破壊する他者としてふるまうかのようにであった。

また、へあいづが現れたのだった。へあいづというのは、時折私の周囲に現れてはノイズとして振る舞う、不気味なへ影であった。へ影は私を日曜日の悪魔にした。そしてこの悪魔は、しばらくの間私を放さなかった。

私の神経は当時すりへり、強く張りすぎた弦の切れるごとくであった。私という存在そのものが、ある瀬戸際に瀕していたというのか。しかしへ影は、私に個人的に所属しているのでもないようだった。私が「日本人」という類に所属していることと、関係が深いようであった。

このへ影を明晰に記述しよう。私の学

巻頭エッセイ 〈影〉を描く

東海大学外国語教育センター助教授
小倉紀藏

問的決意はここに固まった。このへ影を記述できなくて、何の学問であり何の認識であろうか。それが私の思いであった。心理学でも歴史学でも社会学でも人類学でもない。それらによつてはこのへ影を記述できない。なぜか。記述する自己を、記述される対象から分離してしまっているからだ。たとえば最近、カルチュラル・スタディーズという方法論が脚光を浴びていて、私も魅力を感じることがあるのだが、どこか物足りない。隔靴搔痒である。それは、文化を記述する「自分」がいまだ文化の「外部」にあるからなのだ。

へ影を記述できるのは、強いていえば、哲学であろうか。しかし、既存の哲学ではない。自分独自の哲学が、必要なのだった。他者認識の問題、主体の問題、罪、歴史、権力文化、国家、民族、エロティシズムの問題……それらがこのへ影にはびつしりと宿っていた。

すべての既存の学問的方法論を超えたい。その手がかりを、私はつかんだかのように思った。しかしその後十年、私の歩みは遅々として進まない。それが証拠に、まだへ影について私は何も書くことができていないのである。

おぐら きぞつ



一九五九年東京生まれ。東京大学独文科卒業。ソウル大学哲学科博士課程修了。専攻は韓国哲学。現在、東海大学外国語教育センター助教授。著書に『韓国人のしくみ』(講談社現代新書)など。

日韓青少年交流ワークショップ—韓国語でノジマ—

三月十一日に、横浜市金沢区の野島青少年研修センターにおいて、「日韓青少年交流ワークショップ—韓国語でノジマ—」を開催いたしました。

韓国語を勉強している日本の高校生と、東京韓国学校高等部の生徒が二日間の合宿生活を通して、相互理解と友情を深めました。

ワークショップの内容と、指導してくださった「高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク」の黒澤真爾教諭（関東国際高等学校）からのご寄稿、また参加した日韓双方の生徒の感想をご紹介します。



「日韓青少年交流ワークショップ」は、日本全国の高等学校で韓国語を教えている先生方の団体である「高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク」と、韓国企業などの日本駐在員の子弟が多く在籍する「東京韓国学校」の協力を得て開かれたもので、昨年度まで十回にわたり開催し

てきた「日韓地域間交流促進のためのセミナー」に代わり、「韓国理解促進事業の一つとして今回初めて開催したものです。

今回は、学校の授業で韓国語を勉強している東日本の高校生二十一人と、東京韓国学校高等部の生徒十三人が、一泊二日の日程で生活を共にし、料理コンテストや「20年後の私たち」をテーマにしたグループ別の発表などの共同作業を行いました。

今回の行事の特徴は、日本側の高校生に、これまで一年あるいは二年間勉強してきた韓国語の実力を試してもらったため、行事期間中の参加者同士のコミュニケーションを原則として韓国語で行うことにしたこととです。日韓の高校生を六つの班に分け、さらに各班にチームリーダーとして、大学や専門学校に在籍する韓国人留学生に一人ずつ入っていただいて活動を行いました。

一日目の料理コンテストでは、全ての班が同じ材料を使って韓国料理に挑戦

しました。チームリーダーの指導の下、両国の高校生たちが協力しながら約一時間奮闘した結果、各班からビビンパやキムチチゲ、パジョンなど、見事な作品が次々と発表され、審査員の先生方からは驚きの声上がるほどでした。

また、グループワークでは、まず一日目午後に、「20年後の社会」をテーマにした参加者全員による個人発表を行いました。日本側の生徒も、韓国の生徒に助けてもらいながら準備し、韓国語で発表しました。二日目には、班別に「20年後の私たち」をテーマにした発表を行いました。自分たちの未来をイメージした文章の朗読を行ったり、今回の合宿に参加したメンバーが、二十年後に再会する様子を演劇の形で発表したりと、準備時間は短かったのですが、各班が非常に工夫を凝らした、中身のある作品を発表しました。もちろん、発表はすべて韓国語で行いました。

開会式の時には若干緊張していた参加者も、これらの活動を通じて次第に打

●高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク

全国の高校で韓国語の教育にあたっている教師のネットワーク組織。

東日本・西日本・南日本の3つのブロックに分かれて研修会や教材開発などの活動を行っている。

現在韓国語教育が実施されているか、または過去に実施されていた高校の数は、全国で約170校。

ち解けていき、二日目の閉会式後には、いつまでも別れを惜しむ姿があちこちで見られました。

日本側の参加者は、悪戦苦闘しながらも、韓国語の世界に浸り、「もっと一生懸命勉強しなければ」と、韓国語の学習に対する新たな意欲を抱いていたようです。

また、韓国側の参加者からは、普段あまり接する機会のない日本の高校生たちとの共同生活を通じて、貴重な体験を得ることができた、などの感想が聞かれました。

「韓国語で話したい」と思い始めた高校生たち

関東国際高等学校 韓国語コース 教諭
黒澤真爾

今回の交流合宿には日本側高校生の引率者として参加させていただきました。通常の学校行事ですと、進行や雑務に追われて生徒たちの活動の様子をじっくり観察する余裕がないのですが、今回は少々離れたところから生徒たちを観察することができ、またそのおかげでいろいろなことを発見することができました。

今回参加した日本人の高校生は、皆授業で韓国語を受講している生徒たちです。「参加者間のコミュニケーションは極力韓国語で」という主催者側のリクエ

ストを、彼らはどのように感じていたのでしょうか？ 恐らく「本当にコミュニケーションができるのだろうか」と不安に思っただけで参加した生徒がほとんどだったのではないかと思います。実際に合宿でのコミュニケーションは、彼らが思っていた以上に韓国語ではなされず、なにより崩し的に日本語でのコミュニケーションが主体になっていきました。私たちは無理に韓国語でのコミュニケーションを強要せず、その成り行きをじっと見守っていました。私は、日本語でコミュニケーションしているのだから、彼らはさぞかし楽になった

のだろうな、と
思っていました。

しかし、彼ら（日本側の生徒）の本音はそうではなかったようです。しかたなく日本語でコミュニケーション

を始めたものの、本音では学んだはずの韓国語がうまく使えない自分に「悔しがつて」いる生徒が多かったことが、後になってわかりました。

この「悔しさ」が、今、学習のモチベーションとなって、生徒の心の中に残っています。「次に会うときこそ」と、韓国の生徒と韓国語でコミュニケーションしている自分を思い描きながら、生徒



料理コンテストで班に分かれて韓国料理に挑戦



料理コンテストに出品された韓国料理

研修の合間に



たちは授業と取り組んでいます。期待通りにいかなかったことが、むしろ健全な動機づけを引き起こしているのです。

具体的なパートナーに向けて「韓国語で話したい」と思う高校生が生まれてきたこと。

これが、今回の合宿での、最も大きな成果なのではないかと、私は思っているのです。

◆日程

日時	行事
3/10 (土)	
11:00	開会式 ・開会辞 ・プログラム紹介 ・両国学生代表挨拶
11:40	料理コンテスト ・昼食・審査・表彰式
14:30	コミュニケーションゲーム ・自己紹介ほか
15:30	グループワーク 「20年後の社会」
17:00	夕食（バーベキュー）
20:00	グループワーク発表準備
23:00	就寝
3/11 (日)	
9:00	グループワーク発表準備
11:00	グループワーク発表会 「20年後の私たち」
12:00	表彰式・閉会式

参加した高校生のアンケートから

日本側参加者

● 韓国の高校生ははじめで大人だ。二十年後の自分をしっかり考えていたり、人の話に耳を傾けてアドバイスしたり。もっと日本人は友達同士などで真剣に話し合うことが必要だ。

● 週一回約二年間授業を受けてきた自分の韓国語は、からっきしだった。学校で教えられる韓国語は小さな道具で、自分で鍛えなければすぐにさびついてしまう。

● 日本のあちこちで韓国語を勉強している人たちとも交流できて、とてもいい刺激になった。



グループワーク「20年後の私たち」。テレビ電話で7人いっぺんに話をする

激になった。

● ワークショップの前は「韓国人は日本人が嫌い」だと思っていた。でも今は「そうとも限らないんだよ」と言える。

● 修学旅行で韓国の高校生と交流をした時は、お互いの言葉ができず、考えていることが全然わかりませんでした。でもこのワークショップで、一緒に料理を作ったり、韓国語が全くわからない私に少しずつ簡単なことばを教えてくれたり、日本人と共通の優しさがあるなと思いました。

● 学校の授業では習わないような身近な生活で使う単語を覚えることができた。韓国の生徒は日本語もペラペラだったので、日本と韓国の政治や教育の違い、お互いの夢などについてたくさん話した。グループ発表のために、韓国の友だちが一生懸命韓国語を教えてくれたことがすごくうれしかった。

韓国側参加者

● 最初に国際交流に参加することになった時、少し心配だった。日本の高校生たちと仲よく過ごせるのだろうか……。料理、パーベキューなど、いろいろな活動

を通して、日本の生徒たちに親しみを感ずるようになった。国が違うだけの近くにいる友だちのような気がして、すぐ仲よくなれるということを知った。

● 私たちが話す言葉を一生懸命に聞き、話し、理解しようとする日本の高校生の姿が印象的だった。私も日本の高校生がつかない韓国語で話す時、何を話したいんだろう、と考えながら、一生懸命耳を傾けている自分自身についても、新しい発見をすることができた。

● 日本の生徒たちと、写真や住所を交換して別れたが、今も会いたい。日本と韓国の間にはいろいろなことがあるが、友だち同士としてつきあう時には、たくさん友情を交わすことができる。

● 今回は小さな短い期間の国際交流ではあったが、互いに対する偏見をなくすよい機会だった。互いに心も通じ、率直な気持ちを見せあえた。

● 一泊二日の間とても意味のある時間を過ごすことができた。多くのことを学び、多くの経験もした。

● 今回の行事は、私の日本生活の中で、特別な思い出になるだろう。日本人と「韓国語」という共通語を使いながら過

全体で記念撮影



ごし、大変だったけれどもそれなりに参加した充実感を感じた。日本の生徒たちの明るい考えと、肌にしみこんだ国民性は、学ぶべき点が多く、とても印象的で気持ちがよかった。

● 多くの日本の高校生と接し、彼らの一生懸命韓国語を勉強しようとする姿を見て、自分の国を誇らしく思う気持ちが生まれた。

日韓共同研究フォーラム 第1次研究チーム論文集続刊

日韓共同研究フォーラム第1次研究チーム
(一九九六～一九九九年)の研究成果の刊行が続いています。

既刊の『東アジア経済協力の現状と可能性』
(経済)、『近代交流史と相互認識Ⅰ』(歴史Ⅱ)、
『国家理念と対外認識 17～19世紀』(歴史Ⅰ)
に続き、六月には日本側で政治経済チームの
研究論文集『市場・国家・国際体制』が刊行
されました。引き続き韓国側でも七月中旬に
政治経済チームの論文集が刊行されます。文
化、政治、北朝鮮の各チームの論文集も日韓
双方の事務局で近日中の刊行のための作業に
入っています。

また、今年度から第2次研究チーム(二〇
〇〇～二〇〇二年)も研究成果の出版準備期
間に入り、各チームで研究の仕上げを急いで
います。

第4巻『市場・国家・国際体制』 (政治経済チーム)

この度 政治経済チームは日韓共同研究叢
書第4巻として『市場・国家・国際体制』を
上梓した。この研究論文集は日韓米を中心に
形成された国際政治経済体制の歴史的分析か
らなる第一部と、日韓の代表的な産業及び公
共政策に関する比較研究を中心とする第二部
から構成されている。縦軸的な時間と横軸的
な空間を交差させたことに大きな特徴がある
といつてよい。

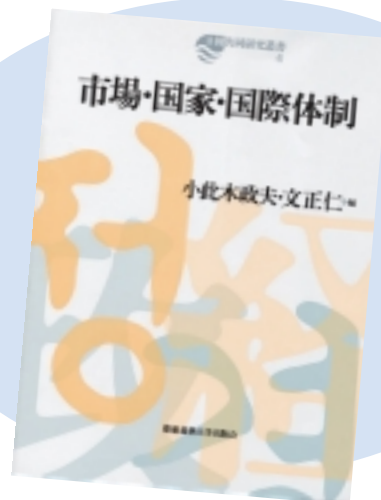
第一部では、冷戦期と新冷戦期を中心に、
日韓間に形成された国際体制の起源、内容、
変遷、アクターの動向などが四つの論文によ
って分析された。また、第二部では、半導体
技術開発政策、金融政策、中小企業発展、コ
メ市場開放政策、規制緩和と制度変動が比較
された。また、総論として、日韓政治経済の
比較分析の領域、理論、課題が論じられてい
る。全九章からなる大冊である。

しかし、そのような成果にもかかわらず、
このような共同研究がひとつのジャンルとし
て十分に成立することを実証したことに最大

の意義があるのかもしれない。日韓の十名の
研究者は研究視角、論点、解釈などについて
十分に意見を交換し、協力を惜しまなかった。
とりわけ深く記憶に残っているのが、一九九
七年の済州島会議である。日韓、米韓首脳会
談が開催された歴史的な会議室が提供され、
参加者一同は共同研究の持つ大きな意味を噛
み締めながら討論できたからである。

慶應義塾大学法学部教授

小此木 政夫



第4巻『市場・国家・国際体制』日本語版

日本における韓国・朝鮮研究 図書館編 ②

都道府県、政令指定都市、県庁所在地を中心に公立図書館での韓国・朝鮮語（ハングル）図書の所蔵状況に関する調査を行い、103館から回答を得ました（5月末現在）。

韓国・朝鮮語図書を所蔵していると回答した図書館は79館で、1000冊未満の所蔵数の図書館が大半です。特に韓国・朝鮮語を母語とするニューカマーの住民が多く居住する都市部の地域で所蔵が多い傾向が見られます。所蔵内容では児童書が多く、日本の小説で韓国語に翻訳されたものを所蔵するなど、地域の居住者の必要に応じた収集

を行っていることがうかがえます。

また、その一方で、韓国をはじめとするアジア地域との交流に力を入れている地方では、姉妹都市や特定の韓国の公立図書館と図書交換を行ったり（富山県立図書館－江原道立図書館、福岡市－釜山市）、歴史資料を積極的に収集したりするなど（鳥取県立図書館）、独自のコレクションを形成しています。

現在、公立図書館ではOPAC（Online Public Access Catalog:オンライン利用者目録）上でのハングルを用いた図書の検索は実現していません。近

年中にハングルを含むアジア言語の処理が可能なユニコード対応の図書管理システムが登場しますが、現地語を解する専門の司書を配置しない限り完全な入力是不可能であり、しばらくは日本語やローマ字への置き換えによって入力する方式が続くと思われます。ほとんどの図書館では、蔵書数がそれほど多くないこともあり、カード目録や冊子目録を利用したり、韓国・朝鮮語図書を別置きするなどして利用者に現物を実際に確認してもらうようにしています。

◆韓国・朝鮮語（ハングル）図書の所蔵状況

1～9以下	5館
10～49以下	13館
50～99以下	6館
100～499以下	30館
500～999以下	9館
1000～2999以下	9館
3000以上	6館
不明	1館

◆所蔵の多い図書館（所蔵数は概数含む）

- 群馬県立図書館（1200冊）
- 宮城県図書館（1200冊）
- 大阪府立中央図書館（1200冊）
- 豊中市立岡町図書館（1257冊）
児童書が豊富（1197冊）。
- 川崎市立川崎図書館（1555冊）
『韓国朝鮮コーナー書名目録』。韓国・朝鮮語資料の横に日本語の韓国・朝鮮に関する資料を配置している。
- 鳥取県立図書館（2200冊）
『ハングル図書目録』。朝鮮時代の歴史資料（『朝鮮王朝実録』『増補文献備考』『同文彙考』『燕行録選集』ほか）、掛軸

「朝鮮漂流之図」などを所蔵。

- 足立区立中央図書館（3000冊）
- 荒川区立南千住図書館、日暮里図書館（3100冊）
- 福岡市総合図書館（6500冊）
友好姉妹都市である釜山市との交換図書のコレクション（釜山市行政、統計、文化芸術関連）がある。
- 大阪市立図書館（6600冊）
中央図書館に3800冊開架。生野図書館にも1600冊所蔵している。
- 東京都立中央図書館（12079冊）
『東京都立中央図書館蔵朝鮮語図書目録』『東京都立中央図書館韓国・朝鮮

語図書目録追加版』。ホームページから東京都内の公共図書館の逐次刊行物目録を閲覧でき、韓国の新聞・雑誌の所蔵も確認が可能。

- 神戸市立中央図書館（15000冊）
『青丘文庫図書目録』。韓哲曦氏（故人）が運営していた朝鮮史専門図書館の蔵書が寄贈された「青丘文庫」がある。

◆冊子体目録の有無

なし	65館
ある	10館
他言語と併用	4館

◆OPACでの韓国・朝鮮語（ハングル）書誌データの入力・検索

データを日本語に翻訳して入力	33館
データをローマ字化して入力	12館
データを日本語に翻訳し、ヨミはカナ・ローマ字で入力している	2館
受入の時期により日本語訳とローマ字化が混在している	2館
英語化して入力	1館
データをカナヨミして入力	3館
システム移行中	1館
OPACでの検索はできない	24館

その他

日本—韓国秋吉台プロジェクト 2000↓2001「ブリッジ／Bridge」

「紆余曲折」と 「方向転換」の意味

〈Borderless Arts Works MONG〉代表

木村典子

一九九九年、韓国の演出家・李潤澤のワークショップ「歌・舞・楽、そして日韓合同公演「ロビンソンとクルーソー」(秋吉台国際芸術村と劇団うりんこの共同製作)へと続いた秋吉台国際芸術村の日韓合同プロジェクト(三年計画)は、今年三月、日韓合同プロジェクト「Bridge—夏の夜の夢」で、地元の演劇

人と韓国の演劇人たちの交流を越えた出会いに発展しました。

「Bridge—夏の夜の夢」は、当初、両国の劇作家がシェイクスピアの「夏の夜の夢」を個々に脚色し、その台本を両国の演出家がそれぞれ演出したものを、秋吉台国際芸術村という場での合同稽古で一つの作品に作り上げるというものでした。約一年という時間をかけて、紆余曲折しながらも、この作業に取り組んできましたが、実際には途中で方向転換を余儀なくされることも多々あり、韓国の劇作家と演出家がベースを作り、そこに韓国と日本の伝統遊戯を取り込みながら、劇を進めるという作品になりました。

しかし、この紆余曲折と方向転換にこのプロジェクトの大きな意味があったと思います。なぜなら、ここにこそ日本と韓国の関係性があり、相手を通して自国の文化や社会、また中央(ソウル)と地方(秋吉台)の特異性をみるという過程が生まれてきたからです。これは、このプロジェクトに参加した地元の演劇人、そして韓国の若手演劇人たちに自らの演劇的課題を残しました。地元の演劇



韓国と日本の伝統遊戯を取り込んで一つの劇を完成させた

人たちには、まさにここで演劇を作っていくのに必要な自らの活動の方向性を考えるという課題を、韓国の演劇人たちには自国の伝統、そしてその現代化の真の意味を探るという課題です。そこから生まれた秋吉台国際芸術村の日韓プロジェクト最後の三年目、日本の説教を韓国の演劇人たちが作品化していくへアジアの伝統と文化を考える」という作業に現在取り掛かっています。

日韓の合同公演は、作品の上演自体であるゴール(最終到達点)となる場合が少ない中で、今回の「Bridge—夏の夜



の夢」がそれぞれの新たなスタートとなった成果は小さくないと思います。このような積み重ねのゴールとスタートにこそ、地方における文化交流の意味があるのではないのでしょうか。

今回、このような成果を得られたのは、秋吉台国際芸術村のもつレジデンスのシステムとこのプロジェクトで私たちが真に得たかった交流の意味をいつも一緒に検討してくれるスタッフ体制が大きな役割を果たしたと思います。

きむら のりこ

現在、韓国在住。日韓の舞台、演劇公演のコーディネーター並びにプロデューサー。一九九八年からの秋吉台国際芸術村の日韓プロジェクトのコーディネーター。二〇〇〇年日韓合同プロジェクト「Sarachi(更地)」(演出太田省吾)のプロデューサーなどを手がける。九七年に渡韓し、韓国の劇団木花レバトリリーカンパニーに在籍。現在、韓国で公演企画制作事務所「Borderless Arts Works MONG」を運営。

「ブリッジ」の きっかけをつくる

秋吉台国際芸術村企画課

福田泰嗣

「私は世界各地でワークショップを開催してきたが、こんなに早くリズムを感じて踊る参加者は初めてだ。特に山口県は韓国にも近いし、昔から多くの人たちが行き交っている。血が彼らを躍らせるんだらうか？ やはりつながっているんだね」

一九九九年日韓共同プログラム「ロビンソンとクルーソー」の創作・公演の開催期間中に行った地元演劇人を対象としたワークショップで講師を務めた演出家李潤澤氏のことばです。このことばは、私を二〇〇〇年プロジェクト「ブリッジ／Bridge」の実施に踏み出させ支えて

芸術村の入口で観客と遊ぶ韓国の俳優たち。時間が来たら太鼓やカネを叩いてお客様を誘導する



くれたことばです。

当プログラムは単に演劇公演をするプログラムというところではなく、「演劇作品の創作」という題材をつかって、可能な接点（ブリッジ）を見出すことを模索する……というコンセプトの下、構築されました。

これまでに各地で日韓合同演劇公演は行われていますが、例えば、韓国の俳優が日本語を覚えて公演したり、日本の作品を韓国で演じたり……といった、一方的なスタイルが多く窺えます。当プログラムの大きな特徴は、①全くゼロの状

態から、テーマを決め、協議を重ね、作品をつくること ②両国にそれぞれ、演出、劇作家等、主となってプログラムをすすめるスタッフを設けたこと、の2点にあります。①については、両国の文化を生かした作品づくり、という共通テーマをもち、互いの文化を融合させていく作業は、相手の文化を知り、そして自分の文化を再認識するきっかけの場となりました。②については、日韓というレベルを超え、人として互いが向かい合う状況ができました。

この意図的につくった、かなり強引なまでの状況においての一年間の創作は相互理解の意識があつて、はじめてプログラムが成立します。予想はしていましたが、文化、習慣等からうまれるあらゆる摩擦は、いろいろな場面で幾度もプログラムに足止めをまねいたことは事実です。しかし「滞在型創作活動の場」である私どもの施設は互いが腰を据えて向かい合う環境が整備されており、この環境も助けてか、「創作」非日常と「生活」日常を繰り返すなか、徐々に融合へと変化をみせたことも事実です。

二〇〇一年三月二十四日、二十五日の二日間、いよいよ、日韓合同公演「Bridge—夏の夜の夢」が、秋吉台国際芸術村の野外ステージで開催されました。

た。言葉を最小限にとどめ、両国の伝統的なリズム（太鼓やカネ）や身体表現を用いて、お客様をまきこんでの祝祭劇です。プロジェクトの成果は何か？ ときかれたとき、私は「参加した者それぞれの心に何らかの動きが生じたこと」と答えます。紆余曲折の多い一年でしたが、李潤澤

日韓文化交流基金事業報告

●平成十三年度下半期助成申請について

平成十三年度下半期（十月～二〇〇二年三月）に実施される青年・草の根交流、国際会議・シンポジウム、芸術交流などの事業に対する助成申請を七月一日から八月一日までの期間で募集いたします（平成十三年度図書出版助成の募集は終了しました。申請案内および申請用紙は、基金にて配布・郵送を行っているほか、ホームページからもダウンロードが可能です。申請書は締切日必着にて、基金まで郵送してください。なお、申請書類の提出に先立ち、事業計画について助成担当者までご相談されることをおすすめします。

●韓国図書翻訳出版事業―「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

以下の図書が韓国図書翻訳出版事業の一環として法政大学出版局から刊行されました。

李光鎬編、渡辺直紀・尹相仁訳『韓国の近現代文学』（この企画のための論文の集感）。

韓国における近代文学の脈絡と成果を世界文学的視野から鳥瞰する代表的論文・評論十三篇を収め、韓国文学の成立基盤とその現状を検証する画期的アンソロジー。植民地化や南北分断という歴史的現

実の中で、作家たちはどのようにして自己の表現を確立したか――

韓国文学の近代性の起源と特性を

めぐる論考を中心に、韓国の二十世紀文学を総括的に展望する。巻末に代表的作家百五十人の経歴と作品を紹介する「人名解説」をはじめ、詳細な「韓国文学史関連年表」「韓国文学関連日本語文献一覧」「事項解説」を付し、国際的な文学

交流と相互理解のための基礎資料を提供する。

4～6月

●中高生交流事業

韓国中高生の訪日研修が実施されました。

団名	期間	男	女	合計	学校訪問日	学校名
第1陣 (中学生)	5/15-5/19	44	62	106	5/16	(福岡県) 福岡市立箱崎清松中学校、 福岡市立住吉中学校
第2陣 (中学生)	5/22-5/26	48	58	106	5/24	(佐賀県) 唐津市立第一中学校、 唐津市立第五中学校



福岡市立住吉中学校訪問



唐津市立第五中学校訪問

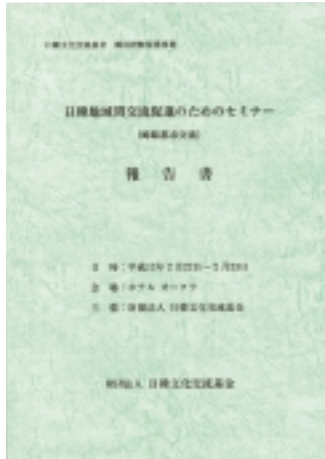
● 報告書

以下の事業の報告書が完成しました。基金図書センターでご覧下さい。

◆第13回日韓・韓日合同学術会議記録（二〇〇〇年十月十九日～二十二日実施）



◆日韓地域間交流促進のためのセミナーへ姉妹都市交流（二〇〇〇年二月二十二日～二十三日実施）



◆日本大学生訪韓研修団（二〇〇〇年十月十日～十月十九日実施、二〇〇〇年十月十七日

～十月二十六日実施、二〇〇〇年十一月七日～十一月十六日実施）



◆訪日学術研究者論文集

アカデミック 第七巻（一九九九年四月～二〇〇〇年三月）

歴史 第四巻（一九九九年四月～二〇〇〇年三月）

◆訪韓学術研究者論文集

第一巻（一九九二年八月～二〇〇〇年三月）



● 訪日団

団体名	計	男	女	期間
教員（高等学校）	20	17	3	5/22 - 5/31
教員（初・中・高）	20	15	5	5/29 - 6/7
教員（初等学校）	20	10	10	6/12 - 6/21
教員（中学校）	20	11	9	6/12 - 6/21
大学生（1）	20	12	8	6/26 - 7/5

● 訪韓団

団体名	計	男	女	期間
岩手県教員	20	15	5	5/15 - 5/24

● 理事会・評議員会

四月六日に第28回理事会が開催され、二〇〇一年度の事業計画案および予算案が承認されました。六月七日には第29回理事会が開催され、二〇〇〇年度の事業実績および決算が承認されました。

また、両理事会に引き続いて評議員会が開催され、今後の基金事業のあり方について話し合われました。

訪日・訪韓フェローシップ 平成14(2002)年度募集

来年度訪日・訪韓フェローシップの募集要項が確定しました。

詳細は、各問い合わせ先に直接ご連絡されるか、基金ウェブサイトをご覧ください。

【訪日フェローシップ】

1. 目的

韓国の優れた若手の学者・文化人等幅広い研究者を日本に招聘し、日本で研究・調査等の活動を行う機会を提供するとともに、日本と韓国との文化交流・相互理解の促進に資することを目的とする。

2. 対象者

(1) 学者・研究者等

i. 一般分野

a. 韓国の人文・社会科学分野の若手の学者・研究者等で日本に関する研究(比較研究を含む)活動を行おうとする者(自然科学・医学・工学の分野の研究者は対象としない)

b. 教育者・研究者として関係専門分野において経験を積み重ね、さらに日本において研究活動を行おうとする者

ii. 歴史分野

日本と韓国の歴史、両国の関係史、朝鮮半島に関する研究を行っている韓国等の学者・研究者

(2) 博士論文執筆者

人文・社会科学分野を専攻する韓国の研究者で博士号を得るために必要な課程を修了し、博士論文執筆のために日本で研究滞在する必要がある者

この場合、研究テーマは日本に関係するもの(比較研究を含む)

3. 募集人数

一般分野 20名 歴史分野 15名

4. フェローシップの期間

3カ月以上1年以内

5. 応募資格と選考基準

(1) 応募資格年齢は、満30歳から最高53歳までで博士課程を修了した者及び下に準ずる者

(2) 日本語を読む・書く・話す能力が十分にあること

(3) 日本での研究等の活動に支障のない健康状態であること

(4) フェローシップ期間中継続して日本に滞在・研究できること

(5) 若手の学者、研究者を優先する

が、学歴、職歴、学問上の地位、業績等も考慮される

(6) 日韓文化交流基金フェローシップと他のフェローシップ等を同時期に重複して受給することはできない

(7) 過去に日韓文化交流基金のフェローシップを受給した者については相当期間(最低満3年)経過していない

【訪韓フェローシップ】

1. 目的

日本の優れた若手の主として歴史分野の学者・研究者を韓国に派遣し、韓国で研究・調査等の活動を行う機会を提供するとともに、日本と韓国との文化交流・相互理解の促進に資することを目的とする。

2. 対象者

日本と韓国の歴史、両国の関係史、朝鮮半島に関する研究を行っている日本の若手の学者・研究者

3. 募集人数 5名程度

4. フェローシップの期間

短期 3カ月以上6カ月以内

長期 6カ月以上1年以内

5. 応募資格と選考基準

(1) 応募資格年齢は、満30歳から最高53歳までで博士課程を修了した者及び下に準ずる者

(2) 韓国語又は英語のいずれかの読む・書く・話す能力が十分にあること

(3) 韓国での研究等の活動に支障のない健康状態であること

(4) フェローシップ期間中継続して韓国に滞在・研究できること

(5) 過去に日韓文化交流基金のフェローシップを受給した者については、相当期間(最低満3年)経過していない

(6) 日韓文化交流基金フェローシップと他のフェローシップ等を同時期に重複して受給することはできない

(7) 若手の学者、研究者を優先するが、学歴、職歴、学問上の地位、業績

等も考慮される

【フェローシップ申請方法】

訪日フェローシップ申請者は、在韓国日本国大使館公報文化院、在釜山・済州の日本総領事館で要項及び申請書を受領し、必要事項を日本語で記入の上、10月末日までに最寄りの日本国在外公館に提出すること。なお、日本(当基金)では、本件申請書は受理しない。

訪韓フェローシップ申請者は、当基金で要項及び申請書を受領し、必要事項を記入の上、10月末日までに、当基金に提出すること。

また、当基金のウェブサイト(<http://www.asc-net.or.jp/jkcf>)から、訪日・訪韓フェローシップの要項と申請書の書式をダウンロードできる。

一度提出された申請書及び添付された附属資料は、一切返却しない。

選考結果は、2002年2月初旬までに、訪日フェローシップは申請書を提出した日本国在外公館から本人に、訪韓フェローシップは当基金から本人に通知する。

【連絡先】

在韓国日本国大使館公報文化院

(ウ)110-350 서울특별시 종로구 운니동 114-8

phone : (02)765-3011~3

在釜山日本国総領事館文化広報部

(ウ)601-013 부산광역시 동구 초량동 1147-11

phone : (051)465-5101~6

在済州日本国総領事館

(ウ)690-180 제주도 제주시 노형동 977-1

phone : (064)42-9501~6

(財)日韓文化交流基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-

12-1 虎ノ門ワイコービル3階

phone : (03)5472-4323

基金ホームページURL

<http://www.asc-net.or.jp/jkcf>

ホームページ E-mail : jkcf@asc-net.or.jp

図書センター E-mail : lib1jkcf@oak.ocn.ne.jp

●発行

(財)日韓文化交流基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号
虎ノ門ワイコービル3F

電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326

●発行日

2001年6月29日